

18-4

行樂部二夜畫 瑠璃絳瓶人の内匠



18-4

文楽座

四ツ橋畔

戦決も日明 戦決も日今



乍憚口上

春風駘蕩の好季節と相成申候處市中皆々様には銃後愈々御健勝に遊ばされ候段奉賀候

緒而當座に於ては引續いて御好評を賜り茲に陽春四月興行の開場を御披露申上ぐる次第に御座候處御客様方の御要望に従ひ例によつて晝夜二部興行と仕り全座員が總力を發揮して職域奉公を勤むる事と相成り居り狂言の儀も選擇を重ね候上に此度は特に異色とも申す可き「佐藤兄弟の妻」と申す日本精神の昂揚につとむる新作曲を御一燦に供する事と相成り其他文樂座獨自の大舞臺のみを配列いたし候次第に有之わけて此度竹本三瀧太夫改め二代目竹本叶太夫鶴澤友花改め五代目鶴澤燕三兩名の襲名御披露を申上げ全座員懸命に相勤め申候間相變らず御引立を賜り度又鶴澤觀西翁も老齡を提げて久々御目見得仕候間何卒開場の曉は一層の御來場を偏に御願奉申上候

昭和十八年四月

四ッ橋、畔

文樂座 敬白

昭和十八年四月一日初日

初日 晝十一時・夜四時
毎日 晝十二時・夜五時 二部開演

・御觀覽料・

晝の部	
一等席	二圓
二等席	一圓
三等席	五錢
初日	三十錢上り
各等約	二十錢
二割引	十錢

(各等入場税別)

夜の部	
一等席	三圓
二等席	一圓
三等席	五錢
初日	三十錢上り
各等約	二十錢
二割引	十錢

(各等入場税別)

一、二等御座席は五日前より
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符專用電話 南 ⑦ 四七壹壹番

一般御用の電話 南 ⑦ 三〇三八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履は
そのまゝ御入場出來ますから御便利で御座
ります。

晝夜二部興行 四月の人の形浄瑠璃

太夫・三味線・形人總演出

四月一日初日 毎日 晝十一時 夜四時 二部開演

(夜の部)

(晝の部)

通し狂言
本朝

桔梗廿四孝

山景本勝下
物勘助駄原
勝語上り住家の
十勝火種香のの
狐火ののの
十二時—十二時四十五分 幕間
十二時五十分—一時廿五分
一時廿五分—二時五十分
三時—三時十五分
三時十五分—四時廿五分
晝の部
打出し

サンデー毎日所載
橋本關雪宮伯原作
西亭脚色並ニ作曲
藤間藤三郎振附

佐藤兄弟の妻

戀女房染分手綱場

道中双六の別

梅川戀飛脚大和往來

壇浦兜軍記

新口村の

五時—五時四十分 十分
五時五十分—七時 十分
七時十分—八時十分 五分
八時十五分—九時 夜の部
打出し



桔梗ヶ原の段

口(竹本八十太夫)

豊竹松島太夫

中豊竹つばめ太夫

鶴澤友造

後竹本濱太夫

鶴澤寛治郎

人形役割

妻 唐 織 吉田小兵吉

【畫の部】

狂言し 本朝廿四孝

桔梗ヶ原より十種香狐火の段迄

桔梗ヶ原の段
景勝下駄の段
山本勘助住家の段
物語りの段
景勝上使の段
十種香の段
狐火の段

明和三年正月(二四二六)竹本座初演。作者には近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出、竹田平七、竹本三郎兵衛等が名を列ね、全五段に分れ、殊に、第四の切「十種香の段」が名高い。所謂甲越の戦を題材とした大近松作「信州川中島合戦」(享保六年八月||二三八||竹本座初演)に基き技巧を凝らしたもので、武田、上杉

妻 越 高 慈 慈 悴 草
 入 名 坂 悲 悲 峰 刈
 江 彈 彈 正 正 藏 藏 奴
 桐 吉 吉 吉 吉 桐 大
 竹 田 田 田 田 竹 竹
 紋 玉 玉 玉 玉 光 ぜ
 太 德 市 松 造 小
 郎 徳 徳 造 紋 い

景 勝 下 駄 の 段

竹 本 七 五 三 太 夫
 鶴 澤 友 衛 門

人 形 役 割

母 房 越 路
 女 越 種
 慈 悲 悲 藏 藏
 慈 悲 悲 藏 藏
 長 尾 景 勝 桐 吉 吉 桐
 桐 竹 田 榮 三 郎
 竹 田 光 龜 松
 門 造 造 造 造
 造 造 造 造

兩家の確執に足利將軍を殺した齋藤道三の謀判を取合せた作。大體の筋は、先づ初段には武田の重寶諏訪法性の兜の事から不和だつた武田、上杉兩家が、將軍義晴と北の方手弱女御前の取持で和解し、八重垣姫と勝頼の縁組が定まる件や義晴が鐵砲獻上に來た浪人に殺され、賤の方は曲者に奪去られる件、信玄と謙信は將軍暗殺の曲者詮議に三ヶ年の暇を乞、夫で知れなかつた時は各々一子勝頼、景勝の首を討たうと誓ふ條があり。二段目は武田の奥家老板垣兵部が車力簀作を助けたり、長尾の家來を殺した無頼漢横藏が、思ふ仔細あるらしい景勝に宥された後、異形の老人即ち齋藤道三に簀作を與へられて再會を約したりする諏訪明神社頭の件から義晴暗殺後已に三年を経過したが、未だに曲者が分らぬ爲、村上義清が勝頼の首受取に乗込むので、信玄の室は盲目の勝頼と戀人の濡衣を逃がさうとするが義清に見破られて勝頼は自殺する。其處へ、勝頼に生寫の簀作を身代に連れて來た板垣兵部、已に勝頼が自害した後なので、怒つて簀作を斬らうとするが、簀作實は眞の勝頼で、死んだ勝頼は實は兵部が子、つまり兵部が己が子と勝頼を取替て、眞の勝頼



山本勘助住家の段

竹本大隅太夫
鶴澤清二郎

人形役割

母房越路桐竹政龜

女房お種

吉田榮三郎

横藏悲藏

吉田玉助

慈藏悲藏

桐竹龜松

妻唐織

吉田光造

悴峰

吉田小兵吉

町松

桐竹小紋

物語りの段

大ぜい

物語りの段

竹本住太夫
野澤吉三郎

人形役割

慈悲藏後三直江山城守
桐竹龜松

を簀作として信濃へ追遣り、武田家横領を狙つて居たもので、其逆心を知つた信玄の爲めに兵部は刺され、勝頼の簀作は身分を偽つたまゝ濡衣と共に法性の兜の詮議に旅立つの條迄です。

次いで今回上演の三段目——武田長尾の境目争ひ桔梗ヶ原から勘助住家の段となり、外題の「本朝廿四孝」はこの件りに支那の廿四孝の故事が用ひられてゐる所から來たものである。更に四段目は簀作と濡衣の「道行似合の女夫丸」や和田山別墅の條があり、つゞいて景勝上使から十種香、狐火になり、第五段の戰場となつて總べて悪人亡ぶの大團圓となる。

梗概

甲斐城主武田の執權高坂彈正時綱夫妻と越後城主長尾の執權越名彈正忠政夫妻とは、信州桔梗ヶ原の兩主家の國境で、農夫が秣刈りの争から口論となつた。又、そこにあつた棄兒（慈悲藏の一子峰松）に山本勘助の札が附けてあつたので、勘助を従へる爲めに棄兒の奪合ひとなつたが、遂に時

慈悲藏 後ニ直江山城守 吉田 光造

横藏 後ニ山本勘助 吉田 玉助

母 越路 桐竹 政龜

女房 お種 吉田 榮三郎

妻 唐織 吉田 小兵吉

景勝 上使の段 竹本 隅若太夫

鶴澤 友平

人形役割割

長尾 謙信 吉田 玉徳

長尾 景勝 桐竹 門造

關兵衛 吉田 多三郎

花造 蓑作 吉田 榮三郎

十種香の段 切竹本 重太夫

豐澤 廣助

綱夫妻が子を拾うて歸へる。

雪深い信濃路の山里。後に父の山本勘助を名乗る兄横藏は横道者だが、弟慈悲藏は孝心厚く、今日も母越路に食させやうと鯉を漁つて戻る。妻お種が抱いて居るのは兄横藏の子治郎吉で、老母への孝養の爲、邪魔になる我子峰松は慈悲藏が桔梗ヶ原へ捨てたのだが、お種に其子の行方を訊かれると、結構な處へ養子に遣つた等と氣休めを言ふ。越後の長尾謙信が息景勝來たつて、戸外に窮ふと知るや知らずや、母越路は慈悲藏が雪見を止むるを怒り、鯉など喰べたう無い、裏の簑の筈でも掘つて來いと無理難題、當惑する慈悲藏を見て、父の名跡欲しさの偽孝行は有難うないと打擲する機に下駄が飛んだ。それを景勝拾つて越路に捧げ、横藏を家來にと所望し越路が承知するので、白木の箱を主従の印に残して歸つて行つた。

人形役割

武田勝頼 吉田榮三郎

八重垣姫 桐竹龜松

八重垣姫 吉田光造

腰元濡衣 桐竹紋司

長尾謙信 吉田玉徳

白須賀六郎 桐竹紋太郎

原小文治 吉田兵次

狐火の段 三瀧太夫改め 竹本叶太夫

鶴澤清 太夫

ツレ 豊澤新太郎

琴 野澤錦糸

人形役割

八重垣姫 桐竹龜松

八重垣姫 吉田光造

木曾山木立荒くれた横藏が戻り、母に足を洗はせたり、腰を揉ませたりして居ると、武田信玄到着の知らせに次で、高坂彈正の妻唐織が峰松を抱いて來た。子を餌に慈悲藏を武田家へ召抱へ様とするが、慈悲藏は母の戒めに従つて仕官を斷り、裏手の鋳へ笥掘りに行けばお種は戸口に捨られた峰松を抱き上げる。秘に様子を窺つて居つた唐織之れを見て、子供に乳房を含ますからは、慈悲藏は信玄公へ御味方……と呼ばはつて立去る間もなく手裏劍が飛び來たつて峰松の胸に立つた。それを横藏の所業と睨むお種。此方は慈悲藏、竹鋳で笥を掘つて居たが、鳩あまた集まるを不思議に、六韜三略の巻が埋もれて居らうとも知れずと一心に掘返す。其處へ横藏窮ひ出て掘だした小箱を奪合つたが、誤つて池へ落す。二人の争ひを止めた越路は、改めて横藏に向ひ、面體似たる景勝の身代に立てと迫るが、横藏は聽ず逃出さんとし慈悲藏の手裏劍に膝を傷付けられると、九寸五分を取

上げて右眼を突き、斯く疵付けられては身代りにもなるまい、父の名跡を襲いで山本勘助晴義、謙信の家來直江山城守種綱に言聞す事ありと呼ばはる慈悲藏實は直江山城だつた。横藏は足利十三代の公達松壽丸を我子次郎吉として育てた仔細を語り信玄に頼れたとて小箱を開けて白旗をも示した上傳授の一巻は母の姓を襲ぐ弟に渡し、後日戰場での勝負を約するのだつた。

長尾入道謙信は義晴の後室手弱女御前及び若君松壽丸を招待する爲、諏訪湖の要害に館を新築する。その館に濡衣の父關兵衛は花守となり、濡衣は侍女となり、簀作は庭作りとなつて入り込んでゐる。

手弱女御前、松壽君が御入來になつたといふ時景勝は自ら上使と稱して父に對ひ「手弱女御前に御契約された通りに我が首を刎ねて渡されよ」といふので、謙信は當惑する。この時、關兵衛は簀

作を伴うて出て謙信にお目見得させる。謙信は簀作こそ勝頼であることを知つて、之に塩尻峠に控へてゐる諸大名に上意の返事の使者を命じた。

又、かつて手弱女御前から預つた種子ヶ島を關兵衛に渡して「これを以て將軍義晴公を弑した者があるので、其の下手人を尋ね出せ」と言つた。心に覺えある關兵衛は、ぎつくり胸にこたへ、思案にくれ乍ら鐵砲を擔つて臥所へ行く。(但しこの鐵砲渡しの段は省略して十種香の段へつゞく)

行水の流れと人の簀作が……で、簀作實は武田勝頼が出て、我民間に育ち人に面を見知られぬを幸ひ、花作と成つて入込みしは幼君の御身の上に若し過のあらんかと、他所ながら守護する某、それと悟つて抱へしや、はて……と不審する折から館の息女八重垣姫は、許嫁の勝頼が切腹したといふので、其繪姿に經文讀誦の鈴の音高く、他方は又、腰元濡衣が位牌に掌を合はせてゐる。

其物音に勝頼の簀作も、我身代に立ちし偽の勝頼の命日は今日よと、心に頓生菩提を念じる。と姫は繪姿に向ひ、戀ひて焦れて啣ち泣く。勝頼はあの泣聲は八重垣姫と、其の不慙さ可憐しさに思はず涙して立上る。そこへ駈出たのが濡衣で、似たとは愚か矢張り其儘と、勝頼の足下に泣伏した。その聲を洩聞いた八重垣姫は襖の隙から窺ひ我夫か勝頼様かと飛立つ心を押靜め、又繪姿と見比べた上、矢張眞の勝頼様ぢやと走り出て取継る。勝頼は何處迄も簀作の積り、勝頼などは覺え無しと云ふので、姫は濡衣に向ひ、もし其方の知邊でも殿御でも無いなら、どうぞ仲介をと頼む。

そこで濡衣は、仲介せまいものでも無いが、まこと心底からの御執心なら慥な證據が見たい、其誓紙には諏訪法性の御兜を盗み出して貰ひたいと云ふ。さては兜を盜めとは、これこそ眞實の勝頼様に違ひはない、と喜んだ姫は男に縋り泣く。が勝頼は心強く打明けぬ。そこで姫が自害せんとするを濡衣が留め、此簀作こそ眞の勝頼なりと初め

て明し、つと姫を突遣つた。姫は嬉しいやら恥かしいやら。

折から奥に聲あつて館の主長尾謙信文箱携へ現はれるので、勝頼の簀作は其文箱を受取つて塩尻へと急ぐ。其の後姿を見送つてゐた謙信、やがて白須賀六郎を呼出すと、塩尻までは陸路の絶所、油斷して不覺をとるな、と警めて勝頼の跡を追はせ原小文次に後詰を云付けて急がせる。この物々しき人數は、總て武田勝頼を討手の爲と知つて驚く姫と濡衣。而して濡衣は、武田方の廻し者として謙信に引き立てられる。

一方姫は手に入れた法性の兜に向ひ、勝頼の身安泰を一心に祈願をこめた。と、怪しや忽ち狐火燃え立ち、白狐の姿の池水に映ると見へたが、諏訪明神の神體に等しき兜、八百八狐つきそつて守護する奇瑞に疑ひなしと覺るや、忝なや有難やと兜を捧げ、爰や彼處に燃ゆる狐火に守られて、勝頼の許に急を告げに急ぐのであつた。



【夜の部】

サンデー毎日所載
橋本關雪畫伯原作
西亭脚色並作曲
藤間藤三郎振附

佐藤兄弟の妻

二場

(床本) 佐藤兄弟の妻

源	辨	駿	佐藤	佐藤	母
義	慶	河次郎	忠信の妻	嗣信の妻	藤
經	豐	竹本	竹本	竹本	相
竹	竹	本	伊達	織	生
本	伊勢	源	太夫	太夫	太
雛	太夫	太夫			夫
太					
夫					

扱も其後、九郎判官義經公雨を下せし蛟龍の昨日にか
わる枯魚の身を、奥秀衡に頼らんと、霞とともに都をば
いく夜重ねし旅衣、露けき袖のかわく間も涙しぐれの山
かげを人目の關のしのぶずり、みちのくかけてはるく
と、道もせ氣もせ心さへ休む暇なき暮れ山路、出羽の國
へぞ入り給ふ、義經御あし止め給ひ、いかに辨慶、駿河
次郎出羽に入るまで忍び路を別れわかれの伊勢龜井、常
陸其他の面々も定めて羽黒に待ちつらん、夜越しをかく
れば明日の道今宵の宿打過ぎてとく行かうにて候ずる。
と仰せに武藏謹んで、御言葉至極候へど、はや出羽路に

人形役割割

鶴澤道八	野澤吉五郎	竹澤團六	豊澤團伊三	鶴澤一郎右衛門	豊澤仙松	源義經	桐竹政龜	武藏坊辨慶	吉田玉市	駿河次郎	桐竹紋太郎	佐藤嗣信の妻	吉田光造	佐藤忠信の妻	吉田榮三郎	佐藤兄弟の母	吉田榮三
------	-------	------	-------	---------	------	-----	------	-------	------	------	-------	--------	------	--------	-------	--------	------

も入り申せば、秀衡殿の館も近し、先刻見受し高札の山伏攝待に宿りを求め、今宵一夜は御休みあつても明日には着くべき羽黒の坊。いかさま武藏の申す様、明立の御發足、はや里とても程もなし、一先づこれに早て御みあし、お休みあつて候べし。と落葉かき寄せ石上に積むを錦の褥ぞとまた今更に想ひ出す偲ぶ昔を一時雨やゝあつて義經公、われ兄上と不和となり都を追われおちこちの野末の風の音にさへ、心おかるゝ憂月日覆へる雲のいつの世にまた晴るゝともわかちなき武運の末のこの義經、權に媚びろふ世の中に微運の我れを見捨てなく、いつにかわらぬそち達が忠義の程は忘れまじ、思へば我身の前生に如何なる罪のありつか、定めなき世を怨みなく、我をば責めて赦せよ。と落涙共に仰せある、さしにも猛き辨慶も當千の駿河も衣の袖しぼるばかりの忍び泣き、しばし言葉も涙なり、コハ勿體なき御仰せ、主従三世の理りは我日の本の教なれ、厚恩有情の御君に臣が微忠は數ならず、屋島に消えし嗣信や吉野に散りし忠信を、うらやましくこそ思ひ候。さるにても御武運強き我君様、過ぎし安宅の關とても辨慶殿の頓智と合



せ、富樫が情けと云ひながら、これ皆君の御徳なれ、破
 邪顯正の世の習ひ鎌倉殿の御心もとくるは近き事なるべ
 し、御心強く思し召せ。と勇めの詞義經公、過ぎ越方の
 なつかしく恩愛涙目に浮む露の玉笹踏みわけて出づる二
 人の女連れ、何れ三十路の後や先き、見合し交す言の葉
 もつきせぬ縁の宿世なる。見もふせば山伏殿の日暮れも
 近きこの山路、何れへのお渡り候ぞ。さればこそ、これ
 は都の空より陸奥かけて諸國修行の法者連れ、何都の空
 より御越しとはなつかしくも思ひ候、して今宵御宿りの
 御所も定め参らせ給ふにや、いや／＼攝待報謝もあらば
 格別、樹下石上を伏寝の修験者、幸ひ來たる道の邊の山
 伏攝待の高札に今宵の宿りを求めんと思ふ心に候ずる、
 何處の程か教へ給へ。それこそわらは達の屋敷なれ、君
 の恵みに叶ひなば一夜はおろか七生の佛の慈悲を垂れ給
 はれかし、わけて都の事どもを聞きも申し度儀もござら
 ば。こわ願ふてもなき法の縁、あな尊、峰の松吹く風の
 音も護法最勝の響なれ、草を枕の伏寝さへ沙羅双樹の花
 のかげ、今宵の宿りは八寶莊嚴、さらば是非にも頼み入
 る。さるにても都の事いたく尋ねある程な由縁の人もある。

るべきにや。と何か心にひびく松の嵐か落葉さへ放れぬ縁ぞ一つなる二人はそれと顔見合はせ、さればわらはがつま夫義經卿の御手に随ひ出陣ありし佐藤嗣信、又忠信が留守を預る相嫁連れ、風の便りに兄弟の、さだかならねど討死とも、また失せしとも聞く悲しさ、それも覺悟は武士の妻なればこそ歎かねども屋敷の庵に二人の身の功名案じる老の母、せめて都の話しなどもしました夫兄弟のまことのうわさ知るならば、老をなぐさめ、賜はれかし。と云ふも切なき胸の内、聞いて扱こそ兄弟が館の妻か不便やとうるはふ眼こそ情けなり。義經御聲やはらげて、實に殊勝なりおこと達の孝心貞女聞くからは、まこと話さん都の合戦、又老母にも對面なしとくとなくさめ申べし、いざとくく。とありければ、さらば案内と打連れて行くも細道一筋にはや入相の鐘の聲諸行無常と渡るなり。

夜も深々となりぬれば白露霜とおきかわる秋の庭面のもの淋し、松の葉音の肅々と、木梢を渡る月冴えて更けて身にしむ庵の内、ゆらぐ灯影にうつうつと我子の武運祈るなる老の姿のほの淡し折ふし千草踏みしだき鎧ふ出

で立二人の武者足音亂し庵の外。母上様、母人様、嗣信忠信、只今凱陣仕る。と思ひもふけぬ聲々は老の吐胸をはつしと打つ、それはまことか現身かと簾を上げて思はずも立上りしが押し止まり、ヤレかしまし、かしまし、舊里を出でし鶴の子の松に歸らぬ淋しさよ、我は老木の枯れ残り若木の二人縁り葉の繁るともまた功しに散るとも聞かぬうつけ者、凱陣などゝはけがらわしい、まこと佐藤が伴とあらば、合戦の功名言へ聞かん、さなくば一寸この庵越ゆる事は夢ならじ。と氣丈の老の言葉の矢引けば返らぬあづさ弓、二人が胸の奥深くしばし涙にくれるが、やゝあつて嗣信聲をあげ、音信不通はいく重にも書くも暇なき軍の場、嗣信まづく合戦の様子委しく物語らん、扱も其頃元暦元年二月も末の事なるべし、波は雪散る屋島瀉、寄せては返す敵の勢、外海かけてうち靡く霞にまがふ平家の赤旗、軍は最中午の上刻、平家の大将その中にも門脇殿が二男、能登守教經これに有り、義經きたなしで勝負と舟の舳先きに煙の兩眼、阿修羅の如く雄叫びぬ、其時兄者嗣信殿君に大事なあらせじと駒の銜泡はませ鎧踏ん張り突立つて、これは清和十代の

後胤九郎判官義經なりと大音上げて矢面に水際立つる功名は目覺しくも又勇まし、まつたこれなる忠信は判官殿の御名を名乗る吉野山、花に散り、弱法師、義經捕れよ打取れとひしめく敵を右左り、されど新手は後たねば、今ぞ最後と大音上、いかに寄手の者共よ、弓矢取る身の習ひとて逢ふを敵の引き出物、東えびすが舞の一さしいで、見参くと軍扇さつと開きなば開きおじしけん雪崩しておちこちとなく失せにける。ヤレ待て兩人兄は屋島弟は吉野の花と散りにしと母は今こそ知り得たり、夜目に鎧の伴とも對面したる老の喜び、今宵判官さまの御越をそれと知つたる自らも、伴の功名如何ぞと案じて御前に出でもせぬ、これにて我れも身のほまれ孝行貞女の相嫁が老をなぐさむ心の程何にも増して嬉しいぞやと。よゝと泣く母二人の妻、ほんに思へば母上の御心根のいたわしや、子を知る親の氣も知らで、女心の淺はかになまじ鎧を身につけてまた思ひ増す勿體なや、孝行見えた不孝の科お赦しなされて給われと歎けば母は百倍に嫁の心のいとしさ嬉しさほんにわれは幸せ者、子は武士の道を立つ嫁は年老ふ親に孝心、三千世界にこの身

ほど果報な者のあるべきかと張りつめし氣も今更に心もたるみ身もくずをれ、かつばと伏して歎きける、始終の様子義經公武藏駿河も諸共に静々と歩み出で、いかに老母、健氣なる三人の心底、われこそ判官義經ぞ忠義無双に死したる兄弟、冥加に餘る義經が一家の心、身にせめて我が寫し置く是なる法華經、法地莊嚴菩提の爲め、これを我身に取らすべしと御手の巻物差し出し、又これなる妻兩人母の心慰めんと魂うつす孝心貞節感ずる餘り義經が貞女の心木像に彫り刻ませて末世の鏡と仰せの言葉そのまゝに實にや夫婦は一體の魂うつす操の鏡、曇らぬ面、白石の名をとこしへに高福寺甲冑堂の木像に今に譽れを残しけり。老母ははつと押し頂き有難涙にむせびしが、かゝる尊きこの一卷、末の代かけて家の寶、屋島吉野の伴はおろか、命落せし幾千の源氏平家の一門の死しては敵も味方もなし、衆怨消滅菩提の爲一日一卷十誦の勤め老の一生祈りまつらん。實に申されし佐藤の媼、天晴れ殊勝の御心、この親にして兄弟の日頃の忠節感泣せり、名残りは盡きじいざ我君、早夜も明けん道直ぐに御立有つて候べし。とすゝめの言葉義經公、心残して行かん

とす、袖押しひかへ二人の妻用意の包み取り出だし、自ら二人が夫はらから再びいくさに召されん時何かの御用と貯へ置く、今は用なきこの黒髪一つに添へて参らす程に君の御供にお加へあらば千僧誦讀の供養にも増す喜びに候べし。布施報恩のまことの品心を込めて受納せん。と頂き給へば老母もまた、わらはも供養仕らん、是は倅二人の者武道祈りし末廣のぼゞが供養は老の一さし君の御先途開くるを神かけてこそ舞納めん。と扇を持つて身がまへし。それ人間の一生は電光朝露波の泡、花散る里に住むとても哀別離苦の理りはまぬがれ難き道ぞかし、さるにても嬉しやな、我兄弟の功しを君の御たての浪頭、玉と砕くぞ本意なれ、これは吉野の花と散る、譽れは大和武士のともに盡せぬ魂は君の御そばに隨ひて行く末かけて守りなん、あな喜ばし思ひよな。いざ、出でませ人々よ、君の御武運末廣をいく千代萬御供と差し出す母は一世の縁、妻は來世を二世の縁、出で立つ君は三世の縁、夜も白々と明けの空、五道の守り一筋のみちのく深く急ぎ行く。

文樂座小史（昭和十八年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

戀女房染分手綱こひにようばうそめわけたづな

道中双六の段
重の井子別れの段



道中双六の段

ツレ	ツレ	竹本
野澤	鶴澤	源太
勝太	友花改め	夫
郎	燕	夫
	三	夫

人形役割

本曲は寶曆元年二月（二四一一）大阪竹本座上演。作者は吉田冠子、三好松洛の合作。全篇は、東山の段、涼みの段、與作勘當の段、重の井訴訟の段、道成寺の段、孝行の段（杓掛村）、恩愛の段、道行、親里の段、道中双六、重の井子別れの段、旅籠屋の段、歸參の段、敵討の段の全十三段からなり、この中、重の井子別れの段はその第十段目に當るので、俗に「戀十」と云はれ、また「三吉愁の段」とも呼ばれてゐて、淨瑠璃に、又歌舞伎に度々上演され、人口に膾炙された一段である。

この「戀女房染分手綱」の原作は、寶永五年（二三六八）大阪竹本座上演の、大近松作「待夜小室節」（後「丹波與作」と改題）で、これを改作し、場敷を多くし、筋を複雑にし、舞臺上の技巧を豊富にし、お家物式に仕立て直したものである。

調 踊 踊 腰 乳 本 馬 重
 姫 子 子 り 元 お 母 重 方 三 井
 桐 吉 吉 桐 吉 吉 彌 三 三 子
 竹 田 田 竹 田 田 三 左 別
 小 兵 兵 紋 五 衛 段
 紋 次 夫 太 郎 門 吉 の

竹 本 織 太 夫
 竹 澤 團 六

人 形 役 割

調 宰 宰 腰 本 馬 乳
 元 田 方 母
 お 彌 三 重
 三 左 吉 井
 衛 門 吉 三
 福 領 領 福 桐 吉 吉
 桐 吉 吉 桐 吉 吉 桐 吉
 竹 田 田 竹 田 田 竹 田
 小 藤 多 紋 玉 紋 文
 紋 一 郎 郎 德 司 郎

梗 概

因みに作者吉田冠子とは、人形遣ひの非常な名手、初代吉田文三郎の作者名で、新作淨瑠璃の趣向、人形や舞臺の工夫など、彼の獨創から數多のものが産れ、現在の人形芝居の基礎は彼により作られてそのまゝ今日まで傳來してゐる。（「義經千本櫻」の源九郎狐の人形衣裳に源氏車の模様を付けて今でもその衣裳のまゝを踏襲してゐるのもこの文三郎である。）謂はゞ、人形三人遣ひの大成者とも、且つ人形芝居の基礎を築上げた人とも云へ、現在の人形遣ひが姓とする「吉田」の流祖でもある斯の道の歴史の上に重要な位置を占める人である。

丹波の城主由留木家の息女調姫は、關東の高家入間へ養子嫁子として江戸へ下る約束が出来た。入間家からは奥家老本田彌三左衛門が迎へに來て用意萬端整ひ、いざ出立と云ふことになつた。所が未だ年齢は僅か十歳になつたばかりの姫君は、この東下りが嫌だと俄に云ひ出してむづかるので、お乳人重の井はじめ腰元たちは、手をつく

して慰めたけれど、どうしても御機嫌が直らないので一同困りはてしまつた。

そこへ、丁度姫君と同じ年頃の馬子の三吉と云ふものが、東海道道中双六とやらを弄んで居ると云ふことが聞えるので呼び寄せて姫君の御機嫌をとらせやうと云ふことになつた。

三吉は御前近くの縁先へ来て、望まれるまゝに道中双六の繪解きを、ことば面白く囃したて、東國の珍らしい物語をするので、すっかり姫君のお氣に入り、直ぐにも東へ下ると云ふことになつた。

さて、かうして頑是ない姫君が、東へ下ると御意あつたのは、何と云つても馬方三吉の手柄である。お乳人重の井は、その褒美にと、御前から下され物の菓子や、なにがしの錢を三吉に與へた。

すると突然、三吉は「由留木殿のお乳人重の井さまとはお前か、そんならおれが母様」と、なつかし氣に抱き附かうとするのだ。重の井は、この

小さな馬方がわが子とは、まさかと驚くのだつたが、しかし、胸に覺えのないことではないのだつた。

話は十年のむかしに遡らなければならない。

この由留木家の家老伊達與三兵衛の倅に與作と云ふものがあつた。重の井は能師竹村定之進の娘で、腰元として御殿奉公をして居る中、與作と何時か離れがたない仲になり、その間に與之助と云ふ男の子さへもうけたのであつた。

この不義のことが顯れ、惡者の讒言によつて與作は故國を追放され、馬方にまで零落してしまつた。重の井は父親の定之進の申譯の切腹により、與作と別れ、その後再び歸參して、姫君のお乳人となつたのだ。

今此處に馬方三吉から、母様とすがりつかれ、その身の上を聞かされ、證據の守り袋まで見せられてみると、三吉はまさに我が子の與之助に疑ひはなかつた。

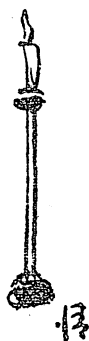
三吉は現在父親の與作とも別れ、幼ない身で近江の石部に馬方奉公をして居るのだ。その望みと云ふのは、父親を尋ね出し、親子三人水入らずで一日でも暮したいと云ふのだつた。これを聞いた重の井は胸もくだけるばかり、現在我が子に馬追ひをさせ、おのれはお乳人よと衣裳を着飾つて居る心苦しき、しかし今の場合母子と名乗つては、姫君のお名にも障ること、たゞ氣も亂れてむせび泣くのであつた。

見るからに賢し氣な三吉に、人違ひと偽つても無駄なことは知れて居た。譯をよく話せば、と今までの物語を三吉に詳しくして聞かせ、心を鬼にして今では母でも子でもないもの、とそのまゝ別れやうとするのだつた。三吉も聞き分けて立ち上つたが、その見すげらしい後影に又こみ上げて來る悲しさは、世が世ならば千三百石の世取りのこの子、雨風雪降りの夜道に馬追ふ姿も偲ばれ、我が身を投げ伏して奉公の身の淺ましさを打數い

たのであつた。

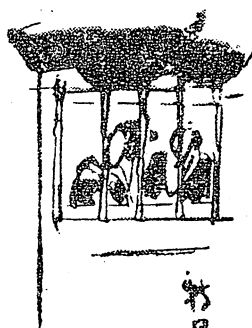
時に奥口から、姫君の御立ちが知らされ、乗物も昇ぎ寄せられた。

そして三吉が姫君のお伽にと、泣く泣く唄ふ、「坂は照るく」の馬子唄に、涙を嚙んではかない親子の別れをしたのであつた。



梅川 忠兵衛 こひびきやくやまとわうらい
戀飛脚大和往來

新口村の段



新口村の段

新口村の段

中 豊竹富太夫

豊 澤團伊三

切 豊竹古靱太夫

鶴 澤清六

大近松作の「冥途の飛脚」〔寶永八年（二三七二）三月竹本座上演〕と、これを改作した紀海音作の「傾城三度笠」〔正徳三年（二三七三）十月（曾根崎新地芝居）豊竹座上演〕との二作をつき合せて替專助、若竹笛躬合作で、「けいせい戀飛脚」が安永二年十二月（二四三三）豊竹此吉座で上演されたが、この作が歌舞伎に入つて「戀飛脚大和往來」と改題され、この「大和往來」が操に更に逆輸入されて天保元年閏三月（二四九〇）から北堀江市の側の芝居で「戀飛脚大和往來」の外題で新口村の段が上演され今日に及んだ。尙全曲は上下二卷よりなり、上卷は生玉の段、飛脚屋の段、下卷は西横堀の段、新口村の段に分れてゐる。

梗概

此處大和の國新口村は、たゞさへ都離れたわび

人 形 役 割

取	捕	親	針	置	藤	傳	水	傾	龜	古	八	忠
	手	孫	立	頭	治	が	右	城	屋	手	右	三
	小	右	の	巾	兵	ば	衛	梅	忠	買	衛	女
卷	頭	衛	道		衛	ッ	門	川	兵		門	房
		門	庵						衛			
大	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	桐	桐	吉	吉	桐
ぜ	田	田	田	田	田	田	田	竹	竹	田	田	竹
	藤	榮	瓢	常	駒	兵	多	紋	龜	龜	万	政
い	一	三	壽	次	三	次	三	十	松	夫	次	龜

しさに、雪さへ降り籠めて年の暮と云つても人影少ない片山里だつた。

今日はどうしたものか忠三郎の家の界限に、節季候だの古手買だの順禮だのと、うさんくさい者たちがうろついて居た。

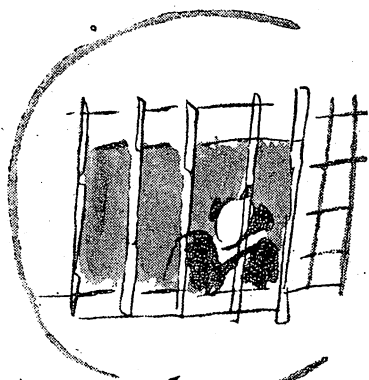
大阪新町の茶屋で、八右衛門への意地づくで、官金の封印を切つてしまつた龜屋忠兵衛は、犯した罪のほども恐しく、遊女梅川と手に手を取つて人目を避け、我が親里新口村へと落ちて來たのであつた。

旅馴れぬ梅川をいたはりながら、親孫右衛門には家來同然の忠三郎の住家へ立ち寄つて、忠三の女房に様子を聞いてみると、忠兵衛の詮議の手は早くも此處までのびて居ることを知つた。忠三の女房が二人の顔を知らぬのを幸ひ、それとは告げず留守の忠三郎を呼びにやつた。

忠兵衛が、實の親孫右衛門に直かに會へないのは義理と云ふものがあつたからだ。忠兵衛は養子

新口まゝの段
 此処槽下豊竹古鞠太夫

相勤申付



として早く大阪へやられ、養子親の妙閑と云ふものがあり、許嫁のおすはと云ふものがある身の上で、今度の仕儀に及んだのであつた。然し梅川と現在の様な仲になり、今大罪を犯してしまつた忠兵衛とすれば、今生の名残りに一目親の孫右衛門の顔が見たかつたのだ。

障子の内で梅川としばし涙にくれて居たが、ふと外を見ると懐しい故郷の人々が、野中の畠道を吹雪をあび乍ら道場参りにつゞくのが見えた。

その中に緞子の肩衣に老の足もとぼ／＼と近づいて来る年よりがあつた。これこそ父親の孫右衛門に間違ひなかつた。然し詞さへかはすことの出来ない今の身の因果に、忠兵衛は身もだへしたのだつたが、梅川も初めて見る我が舅、男のため孝行もしたいとつぶやきつゝも、如何ともする事の出来ない夫婦なのだ。

孫右衛門はそれとも知らず此の家の門口を通り過ぎ様とした時、ついすべつた薄氷に、足駄の鼻

緒をぶつり切らして轉んでしまつた。これを見た梅川はもう黙つては居られなく、走り出て孫右衛門を抱き起した。そしてお足も洗ひ鼻緒も上げて上げませうと云ふので、孫右衛門は見なれぬやさいい女性の出現に驚いたのであつた。

様子を聞くと、たゞ旅の者とはかり舅の親父さまと同じ年配、生きうつしの懐しさに、御用に立てさせて頂きますと云ふのだ。詞の端にさてはそれと氣のついた孫右衛門は涙を押しかくし、不行跡のわが子のいとしさを、それとなく託ち、養子親の妙閑殿は忠兵衛詮議のため一昨日牢に入られ、その義理として若し忠兵衛がこの邊へ來たら親が細かけ渡さねばならぬ。あゝどうぞ來て呉れねばよいが、然し一日でも早く妙閑殿を牢から出すのが何よりの孝行、覺悟を極めて名乗つて出したいがそれも親の目にかゝらぬ所で、と血筋の恩愛に泣き沈んだ。

そして梅川に金一と包を與へ、これを路銀に遠

い所へ立退いて呉れ、と云ふので、梅川はその金を押いたゞきこの世の別れにその人に一目逢つてやつて呉れと頼むのだつた。

然し逢へば縄をかけるか、訴人じなければ濟まない義理固い孫右衛門だつた。それではと、有合ふ手拭で目かくしゝて、一と間に悶へる忠兵衛と親とも子とも名乗らず、手と手を取りかはして名残りを惜んだのであつた。

折柄あたりは物さはがしく、今朝からその邊りの様子を伺つて居た巡禮たちは捕手の役人と打ちつれ、忠兵衛の詮議に來たのだつたが、そのまゝ引返して行つたので、孫右衛門は二人を裏道から逃がし、後影の見えなくなるまで聲をしきりに、叫びつゝ落ちゆく道筋を教へたのだつた。

(佐和利) 新口村の段

コレ忠兵衛様、ほんに爰は劔の中、斯うして居ても大事ないかえ、ア、いや、男氣な忠三郎、頼んで今

夜は爰に泊り、死ぬる共故郷の土、生の母の墓所、いっしよにうづまれそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたいと、おろ／＼涙梅川もそれは嬉しうござんせう去ながら、私がとゞ様かゝ様は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ様は眩暈持若もの事は有るまいかと我身のうへより案じられ、今一度京の兩親に、一目あふて死たうござんす。

お心付いたこのお金、逆様乍ら戴きます、大阪を立ち退いても、私が姿目に立てば、駕籠に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日、三日夜を明し、廿日餘りに四拾兩、つかひ果して二分残る、金故大事の忠兵衛様、科人にしたも私から、嘸憎からう、お腹も立とうが因果づくと諦めて、お赦しなされて下さりませ、親子は一世の縁とやら、此世の別れにたつた一目、逢うて進んで下さんせ。

壇だん浦うら兜かぶと軍ぐん記き

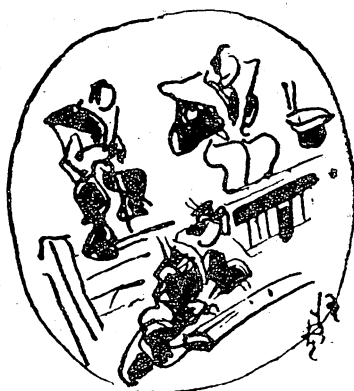
阿古屋琴責の段

享保十七年（二三九二）九月九日竹本座初演。作者は文耕堂、長谷川千四の合作。大近松の「出世景清」の改作で、全五段の中、この第三段目の口阿古屋琴責の段が最も有名である。

梗概

平家の侍大將悪七兵衛景清が屋島壇の浦の戦ひより行方知れず、種々詮議に手を盡した末、秩父庄司重忠、岩永左衛門は、榛澤六郎に命じ、景清と云ひ交はした遊君阿古屋を白洲に召し寄せ、景清の行方を尋ねる。阿古屋は今も途中で榛澤様が景清の居所を知つてゐるなら白狀せよと仰せられだが、知らぬ此身は幾度御問ひなされても、お客へは只一つと惡びれもしない。岩永は氣をいらち

阿古屋琴責の段



阿古屋 竹本 伊達太夫
重忠 竹本 相生太夫
岩永 竹本 長尾太夫
榛澤 竹本 文字太夫

ツレ 野澤 喜左衛門
野澤 勝太郎
胡弓

人 形 役 割

秩父庄司重忠	桐竹門造
岩永左衛門	吉田玉助
榛澤六郎	桐竹紋司
阿古屋	桐竹紋十郎
水 奴	吉田兵次
水 奴	吉田常次
水 奴	吉田兵二郎
水 奴	桐竹龜の輔

申し付けた責道具を持てと命ずると、奴共は手にく手桶、梯子、さい槌、棒などを持つて来る。重忠はこれを押止め、女一人に白狀さすに仰々しい責道具は無用と、申し附けた琴、三味線、胡弓を取り寄せる。岩永は不興氣に責道具とは此樂器の類ひ、こりや詮議に事寄せて慰みせらるゝかと詰りかゝるが、重忠は唐土の故事を引いてこれをなだめ、阿古屋に三曲を演奏させる。

糸竹の調は整然として一糸も亂れぬ。重忠はその音色によつて實際景清の居所を知らぬ事を知り岩永の不承知を退けて、阿古屋を己が屋敷へ伴ひ歸へる。



文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おおよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶暦あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のはうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。

今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のはもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

（河竹繁俊氏稿より抜萃）

京阪神松竹系各座
四月興行お知らせ

大 歌 舞 伎 座
八二八二 戎 電

曾我廼家五郎劇

毎日 晝正午 二部開演
夜五時

一部観劇料
腰席 二五〇〇
三階席 一八〇〇
二階席 一五〇〇
(税別)

大 中 座
九七二一 南 電

新生新派

毎日 四時開演

一部観劇料
腰席 二五〇〇
三階席 一八〇〇
二階席 一五〇〇
(税別)

大 角 座
〇一二二 南 電

厚東 西生 劇舞伎劇 大合同

毎日 晝正午 二部開演
夜五時

一部観劇料
腰席 二五〇〇
三階席 一八〇〇
二階席 一五〇〇
(税別)

大 辨 天 座
八七二 南 電

不二洋子一座

毎日 正午より二回開演
日曜・祭日・十時開演

一部観劇料
平場椅子席 六九
一等席 一三〇
(税別)

大 花 座
九五四一 南 電

新興演藝特輯番組

毎日 正午より二回開演
日曜・祭日・十時開演

一部観劇料
階下席 一六八
階上席 一六八
(税別)

大 あ べ 劇場
五八九三 戎 電

一番安い笑ひの劇場

毎日 正午より二回開演
日曜・祭日・十時開演

一部観劇料
階下席 五四
階上席 九三
(税別)

大 劇 座
一三二 戎 電

好評／四月へ續演／
春のおどり

松竹歌劇團總出演
堂々全二十一景

同時封切映畫は
一週 兵六夢物語
二週 敵機空襲
三週 家
四週 望樓の
決死隊

都 京 南 座
五五一 一 園 電

精銳大歌舞伎

毎日 晝正午 二部開演
夜五時

一部観劇料
腰席 二五〇
三階席 一八〇
二階席 一五〇
(税別)

戸 神 場 劇 竹 松
四〇四四 川 電

大歌舞伎

毎日 晝正午 二部開演
夜五時

一部観劇料
腰席 二五〇
三階席 一八〇
二階席 一五〇
(税別)

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は

常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一回不斷の努力を致して居りますが尙御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お蛸子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。お煙草は一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店

は二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗

段方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は

胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相動めますから豫め御承願ひします。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑩三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年三月卅一日印刷
昭和十八年四月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
發行所 鳥江

鎮也

一部 金二十錢

